

リュブリャーナ大学文学部

アジア・アフリカ研究学科日本研究講座

(2008年9月現在)

一宮由布子

(英語) University of Ljubljana, Faculty of Arts, Department of Asian and African studies,
Chair of Japanese studies
(スロヴェニア語) Katedra za japonologijo, Oddelek za azijske in afriške študije, Filozofska
fakulteta, Univerza v Ljubljani
(住所) Aškerčeva 2, 1000 Ljubljana SLOVENIA
(電話番号) +386 (0) 1 241 1446, +386 (0) 1 241 1308, +386 (0) 1 241 1450
(FAX) +386 (0) 1 425 9337
(URL) <http://www.ff.uni-lj.si/AzAfr/>

1. 講座の概要

アジア・アフリカ研究学科は、1995/96年度にリュブリャーナ大学文学部内に設立され、当初から日本研究と中国研究の2講座が存在する。ここ数年はアフリカ学も方法論の一部として開講されている。スロヴェニアでは、中国研究、日本研究の両分野とも、当学科設立以前にはスロヴェニア東方学会の枠内で活動があり、一般向け語学講座やシンポジウムなどを行っていたが、学科はそれらの活動を吸収、発展させている。

2. 講座の位置づけ

日本研究に必要な日本語理解力を持つ研究者を育てるとともに、スロヴェニアと日本との交流を支援できる専門家（翻訳・通訳、ビジネス・コンサルティング、貿易、観光、報道、語学講師など）を養成する。学生には、これらの研究者および専門家に必要な日本語4技能（聞く・話す・読む・書く）を身につけさせることを主な目的とする。

日本研究講座における2年次までは特に言語学習に重点を置き、一次的資料から日本文化を研究できるよう、書き言葉と話し言葉の両方に習熟することを目指している。

3. スタッフ（研究分野）

アンドレイ・ベケシュ Andrej Bekeš（講座長）	: 言語学、日本語学
重盛 千香子 Chikako Shigemori Bučar	: 対照言語学、日本語学、日本語教育
井田 尚美 Ida Naomi	: 言語学、日本語学
一宮 由布子 Ichimiya Yufuko	: 日本語学、日本語教育
柳 ヒョンスク Ryu Hyeonsook	: 図書館学、韓国語教育

守時 なぎさ Moritoki Nagisa	: 日本語学、日本語教育
クリスティーナ・フメリャク寒川 Kristina Hmeljak Sangawa	: 日本語学、翻訳理論、辞書学
ニーナ・ゴロブ Nina Golob	: 日本語学、音声・音韻学
ティンカ・デラコルダ Tinka Delakorda	: 宗教社会学

4. 日本語学習者数 (2007/08 年度)

1 年生	89 人
2 年生	35 人
3 年生	23 人
4 年生および卒論準備中	20 人
一般向け公開講座初級	23 人
一般向け公開講座中級	15 人
合 計	205 人

学習者数に関しては、学科設立時（1995 年）は想定していた 20 人より 2 倍の 40 人の入学希望者が入学し、1997 年度に 60 人、1998 年度に 80 人と年々増加したため、1999 年度からは入学の枠を 40 人、過去 2 年間は 50 人に制限。

5. 授業科目の種類・時間数 (1 コマ = 45 分)

名称	1 週間あたりのコマ数	対象者
<u>(1) 日本語の授業</u>		
現代日本語 I	8 (講義 2、演習 5、L L 1)	1 年生 (必須)
日本語表記	2 (講義 1、演習 1)	1 年生 (必須)
現代日本語 II	8 (講義 2 コマ、演習 6 コマ)	2 年生 (必須)
現代日本語 III	4 (講義 2、演習 2)	3 年生 (必須)
日本語文法概論 (講義)	2	2 年生 (必須)
日本語文法特講 (講義)	2	3・4 年生 (選択)
翻訳 1 (講義)	2	3 年生 (必須)
翻訳 2 (講義)	2	4 年生 (必須)
古典入門 (講義)	2	3 年生 (必須)
古典 (講義)	2	4 年生 (選択)
漢文 (講義)	2	3・4 年生 (選択)
論文技術 (講義・演習)	2	3・4 年生 (選択)
日本語一般向け公開講座初級	2	一般
日本語一般向け公開講座中級	2	一般
合 計	14 種類、1 週間あたり 42 コマ	

(2) 日本語以外の授業

東アジア史 1 (講義)	2	1 年生 (必須)
東アジア史 2 (講義)	2	2 年生 (必須)
人文研究方法論 1 (講義・演習)	2	2 年生 (必須)
人文研究方法論 2 (講義・演習)	2	4 年生 (必須)
中国哲学 (講義)	2	3 年生 (必須)
日本文学 (講義)	2	3 年生 (必須)
東アジア思想史 (講義)	2	4 年生 (必須)
東アジア文化史 (講義)	2	4 年生 (必須)
電子化文書処理入門 (演習)	2	4 年生 (必須)
日本伝統文化 (演習)	2	3・4 年生 (選択)
日本史特講 (講義)	2	3・4 年生 (選択)
日本社会学特講 (講義)	2	3・4 年生 (選択)
卒業論文ゼミ (ゼミ)	2	4 年生 (選択)
日本語教授法 (教育実習)	2	留学実習生、3・4 年生も可

合計： 15 種類、1 週間あたり 30 コマ

6. 日本語教科書

- 1 年生¹
- Sodobni japonski jezik I - prvi koraki (現代日本語 I 上) FF Ljubljana 2000
守時なぎさ、小林玲子、武田詩子、高木陽子、倉品さやか著
 - Sodobni japonski jezik I - osnove (現代日本語 I 下) FF Ljubljana 2001
倉品さやか、加藤紀子著
 - Uvod v japonsko pisavo: hiragana, katakana in prvih 854 pismenk (日本語表記入門-ひらがな、カタカナ、基本漢字 854) FF Ljubljana 2003
寒川クリスティーナ、小林玲子、熊谷容子、重盛千香子、前野義昭、宿利由希子著
- 2 年生 『文化中級日本語 I 』文化外国語専門学校編 1994
- 3 年生 『文化中級日本語 II 』文化外国語専門学校編 1997

7. 交流

学科設立以来、1997年に筑波大学、1999年に群馬大学、2004年に日本女子大学、2007年には東京外国語大学と交流協定を締結。また、まだ交流協定は締結していないが、1996年以来、東北福祉大学との短期留学交流も行っている。

特に筑波大学との交換留学は学科設立以前から行われている。現在、毎年7月に筑波大学から日本語教育専攻の学生が約3〜4人リュブリャーナで2週間の日本語教育実習を行い、

¹ 現在、スロヴェニア人学習者の実情およびヨーロッパ言語共通参照枠 (CEF) を考慮した初級教科書を作成中。初級前半については、2006年度より試用版を授業で使用している。

本講座からは毎年3～7人の学生が筑波大学へ1年間留学している。1年間の相互留学は群馬大学とも行われており、2008年度からは東京外国語大学とも同じ態勢に入る。また、日本女子大学からは毎年3月に行われる日本語教育実習に1人参加、リュブリャーナ大学からは年に2人が2週間の短期留学をしている。

なお、筑波大学、群馬大学とは、教員、研究者の交流も頻繁に行われている。

8. 大学制度と日本語カリキュラム

大学は4年制、取得学位は学士（当学科卒業生の学位名は *diplomirani japonolog*）である。2009-2010年度から文学部全専攻をヨーロッパ単位互換制度（*European Credit Transfer System*）に変更する予定。このボローニャ・プロセスの実現に向けて、当文学部では3年（学士）＋2年（修士）の計5年制度に合わせてカリキュラムを変える予定である。

9. 進級試験、修了試験

日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの年末試験（筆記と口頭）は、各学年の進級の条件となっている。筆記試験は漢字、語彙、文型に関する多肢選択や穴埋めの問題、読解、作文の問題から構成される。口頭試験は、予め与えられたテーマについてのスピーチ、ロールプレイ、質疑応答からなる。卒業試験は、卒業論文提出、卒業論文内容の口頭発表（日本語）と、それに関する質疑応答（日本語とスロヴェニア語）、4年間履修した全ての科目を対象にした口頭試問の三部からなる。

10. 問題点

本学科は、日本語教育に関しては、科目の種類およびコマ数も教員も充実しており、初級から上級までの教育を提供できる状況にあるが、日本研究専攻の学生の負担が大きいことが問題である。これは、当文学部の制度上、日本研究専攻がダブル・メジャー（二重専攻制）となっていることによる。現行の制度では、日本研究専攻を選択した学生は、日本研究専攻のほかに、もう一つ何らかの専攻を持たなければならない。もう一つの専攻は、同じ文学部内（社会学、他の外国語、地理、歴史、哲学、比較文学など）、または社会学部および神学部内から選べ、全部で50以上の組み合わせが可能である。

学生はこのダブル・メジャー制度により、4年間のうちに日本語を初級から上級までマスターし、その日本語を使って日本に関する研究をしながら、もう一つの専攻も卒業しなければならないので、事実上、卒業までに通常の在学年数より多めの勉学期間（5～6年以上）を必要とするという問題を抱えている。

また、現在在籍している教員の専門分野のほとんどが日本語学および日本語教育であるため、日本語教育が充実している反面、その他の科目（日本文化等）を担当する教員が求められている。現段階では、主に客員教授の集中講義で補っているが、日本語学・日本語教育専攻の教員が担当する場合もある。